

拙堂會報

第12号

2022年6月1日発行

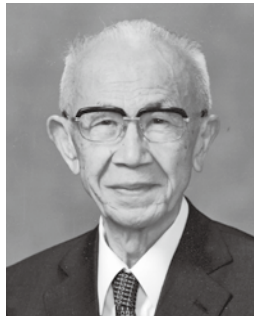
 発行所
齋藤拙堂顕彰会

 理事長 飯田 俊司
津市一身田豊野1406-197

石水博物館「拙堂展」記念講演について	第五回齋藤拙堂顕彰小中学生書道展 6
「和魂漢才の人」	齋藤正和 1
拙堂顕彰の施設	加藤龍宗 2
藩校有造館建学の流れ―その七	飯田俊司 3
堀江敏次郎	中川禎二 3
齋藤拙堂顕彰短歌・俳句受賞	5
第六回齋藤拙堂顕彰俳句・短歌	7
第六回齋藤拙堂顕彰吟道大会開催	9
ご挨拶	田矢修介 10
建物や街に求められるものとは	村主英明 10
令和四年度拙堂会総会報告	11

石水博物館「拙堂展」記念講演について

顧問 齋藤 正和



の文学」、その二は「拙堂と武士道」、その三は「拙堂と海防、とくに地政学の先駆者としての拙堂」です。

この度、石水博物館で「拙堂展」が催され、これに関連した記念講演会が開かれました。その準備に尽力された博物館の方々ならびにご来駕くださった皆さまに衷心より感謝申し上げます。講演会で私は「齋藤拙堂の現代的意義」と題し話を致しました。私は、歴史的人物である齋藤拙堂から今日の我々が学ぶ意味ないし価値を次の三点に絞って述べました。その一は「拙堂

まず、「拙堂と文学」ですが、拙堂は名文家として多くの愛読者をもっただけでなく、文章評論家としても評価が高く、古漢語散文の評論書である『拙堂文話』は名著として現代中国でも読まれています。(上海復旦大学出版社から二〇〇五年に発行されている)。「拙堂文話」において、拙堂は「文章は国家の命運に関わる」とか「文章は気を以て主となす」とかの命題を掲げています。私はこれを、国家が隆昌する時は気すなわち人々の心のエネルギーの質が高く且つ力強く、それが文章にも表れる。逆に気の質が高く力強い文章が世に出れば、それが人々を奮

起させ国家を興隆に導くと解釈しています。第二は武士道ですが、拙堂は武士道と言わず「士道」と言います。「士」とは為政者を意味し、士は文武双全であらねばならぬと教えています。士には気節がなければなりません。その気節は士の心から出ます。士の心と書いて「志」という字になります。何に志すか。それは「道」です。士の行いの規範です。為政者である士は私慾に惑わず、國と民を導き且つ守る正しい道を実践しなければなりません。その正しい道は古聖人から学ぶのです。士は中国古典「経書」から道を学べというのが拙堂の教えです。私はとくに拙堂の「士は米を生産せずに食べさせてもらっているのだから、士には身を捨てても百姓を守る責務がある」という言葉が好きです。第三は海防すなわち国防です。当時ロシア、イギリス、アメリカが日本に開国を迫り、あわよくば植民地にしようとしていました。拙堂は、国防のため真に頼ることのできるものは何か、また、本当に恐れなければならないものは何かをしっかりと知らなければいけないと説いています。

外敵を知るために世界地理の情報が重要だとし、これを人々に先駆け懸命に研究しました。その成果の一つである『海防五策』を読みますと拙堂が「地政学」の先駆者であったという感を強くします。なかでも、外敵の武力侵略にもまして思想文化による侵略即ち「洗脳される」ことに用心せよと説いていることは注目に値します。

・・・・・・・・・・・・・・・・

和魂漢才の人

会長 加藤 龍宗



おろかなる戦の下に斃れゆきし

民の多きに涙あふれむ

令和四年三月 龍宗作

今年は拙堂生誕二百二十五を迎える、私達は、戦後七十七年、平和な社会の中に日々の生活を営むことが当たり前の事となって来た。而し新型コロナウイルスとの戦いに、通常の生活は崩れさり、新しい型の生活を余儀無くされた、それは自由を奪はれ、目に見えぬ敵との戦いの日々となった。そんな中二月二十五日、目を疑うニュースに驚かされた。ロシアがウクライナに侵攻したのである、日が経つにつれその戦況が知らされ、世界はロシアの狂気（プーチン大統領の独善的な挙行か）に愕然とし、同時にウクライナの惨たる被害に同情と救いの手をさしのべたのである。近年これほどまで鮮明に又リアルに戦争そのものを映像にし、全世界に知らしめたことがあったであろうか、二〇〇三年のイラク戦争以来である、戦争の悲惨さ、生命の大切を知らしめ、いかに虚しいものであるかを認識させられ、紛争の解決は外交努力によらねばならない事を教えてくれる、そして平和の尊さこそが人類の最高の願いであらねばと強く知らされた。さて拙堂が生まれた一七九七年以後は鎖国の時代が破られようとした激動の世ではあったが庶民的には平和な日々が保たれていた。儒学（朱子学）の道を学び教育者として伊勢の地を第二の故郷と定め、自然豊かな中に人生を楽しんだ、そして京の都を始め各地に遊学を重ね当代一流の文人達との交流により高い知識を得、自ら更に漢学者として大成を究めた。拙堂

の師古賀精里は陽明学者であり儒学者であったので江戸幕府の学問の基本にあった儒学が根本であった。堅苦しい理論は避けるが儒学者（漢学者）であった拙堂であるが国学を認める寛容な心で時代を見据えていたと思われる、「和魂漢才」（菅家遺訓）を大切にした江戸時代最後の偉大な儒学者（漢学者）と云える。

いっ^あつも仰^{おほ}ぐものから今^{けふ}日^ふさらに

ひかりたふとき日^ひの神^{かみ}のかげ

皇大神宮にいのりてよめる

この歌からわかるように、いっつもながら仰ぐ伊勢の大神を今日は更に光り輝く太陽神であるよと詠っている、佐々木信綱の父弘綱に和歌の道を学び、伊勢の国学者足代弘訓との交流によりその道を深めたといえる、この歌でも古来より吾国に伝わる神道への理解を感じ儒学一辺倒ではなく、「和魂漢才」を実践した先覚者であったことを知ることが出来る。



拙堂顕彰の施設

理事長 飯田 俊司



新型コロナウイルス感染症の蔓延により、全国に緊急事態宣言が発令されてから二年あまり、蔓延防止等重点措置を含め断続的に感染抑制策が取られてきました。今尚オミクロン株による第六波の蔓延が続いています。このため、予定していた拙堂顕彰会の活動も残念ながら一部が中止または規模縮小を余儀なくされています。

こうしたなかで、予てから会員の中から拙堂顕彰活動を一段と進めるには、記念館などの施設が必要と言う声もあり、そのための調査研究を始めました。

三重県下には、郷土の歴史・史跡、文化遺産、自然環境、顕彰すべき人物などを収集展示する公営、民営の博物館、資料館、記念館などが百八十三施設あり、このうち津市には二十施設が

あります。また十八施設は本居宣長記念館、松浦武四郎記念館、芭蕉翁記念館、尾崎愕堂記念館など全国的に著名な人物の記念館です。設置基準の厳しい博物館で市町営のものは四日市市、桑名市、鈴鹿市、亀山市、朝日町の五施設のみで、津市にはありません。

拙堂は教育家、儒学者、文章家、経世家として多彩な才能を有した津市の生んだ賢人、偉人です。しかし、残念ながら津市内でさえも著名人ではありません。したがって、拙堂は個人の記念館ではなく、津市営の博物館か歴史館の中で顕彰するのが適当と考え、県下六市町の博物館、歴史民俗資料館、郷土資料館を見学、各館長にヒアリングをしました。

各館とも郷土の歴史、文化を後世に残して地域の活性化、教育、観光にも役立たせるという目的の下、重要な遺跡・史跡、埋蔵品、古文書、顕彰すべき偉人などを展示、また展示内容を説明した出版物などを発行しています。これら施設には、地域住民はもとより地域外の来訪者も見学に訪れますが、小学校の授業にも利用され、子どもたちが自分の生まれ、育った故郷を大切に思う郷土教育の効果があるとのことでした。

津市には後世に伝えたい多くの史跡、文化遺産があり、多くの偉人も輩出しています。

このことを津市民に知ってもらうことで、市民としてのアイデンティティが生まれ、地域振興や観光振興にも繋がるのではないかと思います。

是非とも津市に博物館または歴史文化資料館の設置を実現したいものです。会員の皆様のご支援、ご協力をお願いします。

藩校有造館建学の流れ―その七

日本の寫眞術の先駆者

堀江 鋏次郎

長崎海軍伝習所派遣の俊英

顧問 中川 禎二



はじめに

前号で督学齋藤拙堂は人材教育の為に長崎海軍伝習所へ派遣した有造館の俊英十二名がどのような近代様式訓練を受けたかを書きました。今回はそのうちの一人、堀江鋏次郎の偉業を取り上げ紹介いたします。

堀江の人物像

津市栄町・四天王寺墓地の西方高台にある齋

藤拙堂のお墓は、皆さんご存知と思いますが、ここから三米離れて堀江鉄次郎のお墓があります。彼の生涯については資料が少ないのですが、お墓の左右側面、背面に刻まれた有造館第五代督学・土居有恪による銘文で彼の足跡・業績の生涯を辿ることに致します。

堀江鉄次郎は、本名は忠雅^{ちゅうや}といい、公式には公肅^{こうしゅく}と名乗り、ほかに松澤^{しょうたく}という雅号を持っています。通称を鉄次郎^{くわじろう}といい、のちに宗平とあらためています。天保元年（一八三一）九月二日に江戸の津藩下屋敷（染井屋敷）で堀江家の第三代忠一の次男としてうまれました。兄が他家を継いだため、二十才で堀江家を継いで津藩につとめ、百五十石の家禄を給され、後に二十石加増されています。彼は幼少期より書をよく読み、剣術・槍術・馬術に優れ藩校有造館ではオランダ語や西洋文化・技術、数学を学び、西洋砲術まで習得しております。その間、大小姓刀番、蘭学教頭、郷徴兵指揮の役職についております。

長崎留学で上野彦馬と運命的な出会い

堀江鉄次郎は督学齋藤拙堂のすすめで、留学生十二名のひとりとして長崎海軍伝習所へ派遣されました。

ここで彼は「騎兵砲隊築城諸項」などを学習し、同時にオランダ人医師ポンペから舎密（セイミ）と読み、オランダ語の（化学）を習うこととなります。医師ポンペの医学伝習所で運命的に

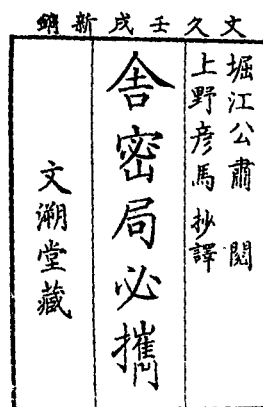
であった人物、それが後に「写真の祖」と称される長崎出身の上野彦馬です。二人は、ポンペ指導のもと舎密^{せいみ}学を学び、更に寫眞術研究へと足を踏み入れます。二人はよほど気があったのか蘭書を参考に独自に研究し、ある時は湿板写真の薬品が近所に悪臭を放ち苦情を受け、奉行所から呼び出しを受けるなど逸話が新聞記事に記されています。苦心惨憺の上、撮影はある程度成功を収めました。安政六年（一八五九年）スイス人の写真家ロシエが来日、二人はロシエに最新の写真技術を学ぶと共に、彼のもつカメラの優秀さに驚嘆、自分達の機材があまりにも稚拙であることが分かりました。そこで堀江は、藩主藤堂高猷^{とうどうたかゆき}に願い出て一五〇両（現在の約千五百万円くらいか）の大金で最新のカメラと写真機材を購入しました。撮影は本物だけに大変よくでき写真師として腕をあげてゆくようになります。

鉄次郎と彦馬、江戸から津へ

万延元年（一八六〇年）藩主高猷から出府せよとの命を受け、堀江は彦馬を伴い長崎から江戸に向かい藤堂藩上屋敷で諸藩の藩主や来客を毎日撮影したと記されています。藩主高猷は最新の西洋文化・写真撮影を諸藩候との情報交換の機会に利用したのでしよう。文久元年（一八六一年）藩主高猷は、堀江と彦馬を伴って参勤交代で江戸から津へ帰国し、二人に寫眞術の披露と共に藩校有造館に設けられた洋学館で蘭学

と舎密学を教える先生に任じました。

彦馬は、舎密を学ぶ上での日本語教科書の必要を感じ、約一年かけてその著述に努めました。藩の援助もあり文久二年（一八六二年）に「舎密局必携^{せいみきょくひつぺい}」三巻が出版されました。これは日本の化学教科書として明治前期まで使われました。堀江はこの「舎密局必携」の校閲を行いました。文で、「国を強くする手段として科学技術進歩の必要性を説き、また科学技術は国を富ませる新しい方向に導く」と論じております。



日本初の化学教科書の表紙

その後の彦馬と堀江

「舎密局必携」の刊行を機に彦馬は、長崎に帰り上野撮影局を開き、坂本龍馬・高杉晋作や伊藤博文など幕末維新の数多くの志士・偉人を撮影したのは有名です。更に撮影技術の研究と後進の育成に努めました。その活躍は日本写真史のなかで燦然たる輝きを放っています。

一方、彦馬帰国後の鉄次郎は藩校有造館の蘭学師教頭を勤めています。文久三年（一八六三）の「天誅組の変」に出兵し、西洋式鉄砲の

威力を発揮させるなどしてその鎮圧にあたり、武士としての役目を果たしております。そして三年後の慶応二年(一八六六)病に倒れ、三十六才の若さで帰らぬ人となりました。



堀江鋏次郎墓碑(側面・正面 2022.4撮影)

「死んでも恩師につかえたい」と願っていた鋏次郎は、拙堂先生のお墓に並んで葬られその墓碑銘には「君を知る人も知らぬ人も皆君の死を惜しんだ」と刻されております。

毎年六月一日、写真の日には、三重県カメラ商組合の人々によって、供養が営まれ、法要はもう六〇年も続けていると言われます。

齋藤拙堂顕彰短歌・俳句 受賞

短歌の部

津市長賞を受賞して

駒田 博之

国語辞典を引くと『顕彰』とは、「隠れている善行や功績を世間一般に知らせること」とあります。

しかし、現代的に考えると、それだけでは意義がありません。加えて、その主人公の目指したものを今の世にどう活かしてゆくか、すなわち、拙堂の目指した人づくりを、いかにプラスした活動をしていくかにあります。

顕彰会のさらなるご発展を祈ります。

津市教育長賞を受賞して

齋藤 宗之

三月二十日、第六回齋藤拙堂顕彰吟道大会の当日、会場の津市センターパレスのドアを開けると、すでに朗々と吟詠の音が響いていました。一瞬にして格式高い場だと悟り、ネクタイを絞めてこなかったことを後悔しました。これまでに参加してきた短歌会とは違い、人数も多く、なにより自分の拙い短歌を、丁寧な力強く吟じて頂いたことに感動しました。大変光栄で嬉し

かったです。また、次々と独吟される吟者の方々の声量、技量に感服しました。

俳句の部

津市長賞を受賞して

西沢 博子

第六回、拙堂顕彰会俳句部の津市長賞という大賞を賜り、大変光栄に思っております。

第一回から参加させて頂いており、やっと最高の賞をいただくことが出来ました、嬉しかったです。津城跡は学生の頃から親しんで来た場所ですが、津公園に生まれ変わっても入徳門はそのまま遺されました。

歴史ある門にふと心の声をかけてしまいます。第一回にも「津城跡の閉鎖なき門冬木の芽」の作品で門を詠みました。

この度の会場での朗々たる吟詠には大きな感動を受けました。今でも胸の底に響いています。有り難うございました。

津市議会議長賞を受賞して

西川 登美枝

この度は栄えある賞をいただきありがとうございます。

市長様始め長の方々の御臨席を仰ぎ丁寧なる

表彰式をしていただき未、感謝申し上げます。
「拙堂顕彰会」の広報を眼にし失礼乍ら投句させていただき封書をいただいた時は思わず万歳をしてしまいました。

此れを励みに、日々外に目を向け歴史に興味を持ち、いただいた兼題を丁寧な詠んで行きたいと思いい心を新たに居ります。

ありがとうございます。

教育長賞を受賞して

亀井カノン

お招き頂き光栄でした。その上久しぶりに痛快な「温故知新」の一日となりました。投句にあたり、拙堂先生の生涯と業績について自分なりに調べ、尊敬の念やまず、興味津々でしたから、みなさんがその拙堂先生の詩文をこよなく愛され、まことに美しく朗々と吟じられるお姿を目の辺りにして、思わず涙腺がゆるみました。帰路まっすぐに四天王寺の先生のお墓を訪ね、数日後には、新しい月ヶ瀬梅林公園に移設された先生の詩碑に報告しました。



第五回齋藤拙堂顕彰

小中学生書道展

昨年より約九十点あまり多い六六四点の応募を頂き、三月四日（金）の開催を目指して準備を進めてきましたが、新型コロナウイルスの感染が一向に収束の域に達しませんでしたので、熟慮に熟慮を重ねた上感染防止と諸般の事情の事情を第一に考えやむを得ず中止としました。

関係各位の皆様には大変ご迷惑をおかけしましたことに心よりお詫び申し上げます、よろしくご理解と御了承いただきますようお願い致します。出品していただいた作品はすべて審査を終え、過日入賞者には賞状・副賞・作品をお届けしました。

稲垣 武嗣

小学生の部

津市長賞

今西 陽香 津市立南立誠小学校六年

津市議会議長賞

平手 綾華 津市立立成小学校 六年

津市教育委員会教育長賞

伊藤誠一郎 津市立新町小学校五年

中日新聞社賞

杉野 旭 鈴鹿市玉垣小学校二年

池田 花音 津市立南立誠小学校三年

伊藤秀治郎 津市立新町小学校三年

今西 結菜 津市立南立誠小学校四年

宮武 百花 津市西が丘小学校六年

齋藤拙堂顕彰会会長賞

海野 彩美 三重大学教育学部附属小学校二年

北川 彩月 鈴鹿市立郡山小学校一年

山崎 華凜 鈴鹿市立玉垣小学校一年

浅野 夏帆 津市立豊津小学校二年

岩佐 悠伽 津市立新町小学校三年

松原 遼空 三重大学教育学部附属小学校三年

大川 寧々 松阪市立第五小学校四年

赤樫 和 津市立南立誠小学校五年

芦川 愛莉 鈴鹿市立玉垣小学校五年

阪 佳歩 津市立豊津小学校五年

日名子陽愛 津市立千里ヶ小学校五年

三尾 心愛 津市立南が丘小学校五年

柴田 怜実 津市立南が丘小学校六年

杉田 妃鞠 津市立新町小学校六年

松本 実華 津市立櫛形小学校六年

特選

須川 愛菜 津市立立成小学校一年

尾崎日菜子 鈴鹿市立玉垣小学校二年

小林 うらら	鈴鹿市立郡山小学校二年
石原 七海	津市立新町小学校三年
江川 綾咲	鈴鹿市立栄小学校三年
松浦 由奈	津市立成美小学校三年
服部友希乃	松阪市立第五小学校四年
前田 陽美	津市立南が丘小学校四年
山下 絢音	津市立戸木小学校四年
市川 湊介	津市立片田小学校五年
桑名 佑京	三重大学教育学部附属小学校五年
村主 佳穂	津市立村主小学校五年
濱田 乃愛	津市立豊津小学校五年
廣川 莉子	鈴鹿市立清和小学校五年
丸山 江子	津市立南が丘小学校五年
湯浅 渚	三重大学教育学部附属小学校五年
桑田 咲歩	津市立南立誠小学校六年
小島 由菜	松阪市立徳和小学校六年
谷口 光	津市立片田小学校六年
堀 柚葉	津市立片田小学校六年



中学生の部

津市長賞

地主 怜央 松阪市立久保中学校二年

津市議会議長賞

市川 結加 津市立久居中学校二年

津市教育委員会教育長賞

遠山 大智 津市立南が丘中学校一年

中日新聞社賞

高橋 愛果 松阪市立東部中学校二年

大浦地美月 私立三重中学校三年

小野 花華 津市立西郊中学校三年

齋藤拙堂顕彰会会長賞

河口 絢香 津市立西郊中学校一年

木谷 綾葉 松阪市立東部中学校二年

川畑聖梨花 松阪市立久保中学校三年

近田沙耶香 松阪市立久保中学校三年

特選

長谷川真理 私立高田学苑中学校三年

市川ひなの 津市立西郊中学校一年

岩崎 舞羽 私立高田学苑中学校一年

井上 璃那 津市立久居東中学校二年

羽田 琉華	津市立南が丘中学校二年
松本 朱理	津市立西郊中学校二年
村上 花	鈴鹿市立白子中学校二年
上田 乃愛	津市立西郊中学校三年
中村 風歌	津市立西郊中学校三年
野田 苺花	津市立西郊中学校三年
堀 夏摘	津市立西郊中学校三年

第六回 齋藤拙堂顕彰俳句・短歌

第六回齋藤拙堂顕彰におきまして俳句、短歌を募集しましたところ、俳句三十九名百七十六句、短歌二十三名八十三首の応募がありました。十二月二四日の選考会の結果、俳句十四名、短歌十四名の人を選ばれました。表彰式は三月二〇日、詩吟朗詠会とともに津市中央公民館の会場で盛大に行われ、受賞作品も朗詠されました。

俳句の部

山崎 満世選

津市長賞

秋意ふと声なき声の入徳門

津市 西沢 博子

選評 入徳門をくぐるとき声のなき声がたし

かに聞こえる。あれは拙堂翁の声に違いない。現代につづく人の世を思うとき、にわかにも秋も深まったように思える。秋意の季語に作者の思いが深く沈む。

津市議会議長賞

布引きの風車すつぱり抱く濃霧

津市 西川登美枝

選評 あゝ銀翼の青山高原の風車であるが、今朝はすつぱりと霧の中に治まっている。廻っていない風車に目をとめた作品で、作者の日常のおどろきが伝わる。

津市教育委員会教育長賞

大紅葉赤門潜る頬朱し

津市 亀井カノン

選評 紅葉、赤門、そしてみずからの貌の頬も、あかく染まる。一瞬の感動を捉えているが、「紅」「赤」「朱」と字を使い分け、一句に奥行を出している。句の完成度が高い。

齋藤拙堂顕彰会会長賞

拙堂の詩をなぞり読む暖かし

津市 成田真喜子

選評 暖かしは、春の季語でもあるが、作者の心情もふくんでいる。作者にとって

佳作

拙堂翁は遠い昔の人ではなく身近に引き寄せている処に共感。「なぞり読む」の普段の言葉が適切でもある。

かるの子の水尾にこぼるる光かな

津市 種田 啓子

捨て山のあの柿その柿だれのもの

津市 山岸美智子

びよんぴよんと跳ねて唐人秋まつり

津市 中戸 悟

梅林の香の馥郁と拙堂詩

津市 西川 幾子

寒空を攪拌したる風車群

松阪市 瀬川 友子

拙堂の墓所と慕ひて小鳥来る

津市 青木千恵子

裸木もぬくき眺めや津公園

津市 内田 成子

届きえぬ想ひ波間に冬阿漕

津市 上野 絢子

拙堂の墓石うしろの春夕焼

津市 奥山 功

温もるる障子明りの如来堂

津市 北 貞子

短歌の部

三芳 公子選

津市長賞

目指すもの人づくりこそ国づくり

「有造」掲げ拙堂がゆく

津市 駒田 博之

選評 津藩校の名「有造」は、詩経からとられたもので、藩主の熱意が、青少年教育に凝るという意味です。その理念を掲げて青少年育成のため拙堂が身をささげたことを格調高く詠んでいる。

津市議会議長賞

石水の鎮もる館のその内に

破れ金継の慾袋あり

津市 樋田 由美

選評 石水博物館には川喜多半泥子の作品が多く收藏されている。中でも伊賀水指「慾袋」は人間の限らない慾が、破裂して「金」で継ぐという半泥子のあそび心と皮肉いっぱい作品である。たんとんと描写しているが、それがかえって「慾袋」の魅力をひきだしている。

津市教育委員会会長賞

高通の栄華を留め建つ句碑を

見下ろす櫓に這ふかぶと虫

選評

津市 齋藤 宗幸

久居藩初代藤堂高通公は俳人でもあった。市内高通公園には句碑が立つ。かたわらの櫓には句碑を見守るかのようにかぶと虫が這う。生あるかぶと虫と永遠に建つ句碑の対比が見事である。

齋藤拙堂顕彰会会長賞

溪谷の梅の香漂う月ヶ瀬に

杖つく老父拙堂碑に立つ

大津市 森永 昌雄

選評

拙堂の「月瀬記勝」は月ヶ瀬梅林の魅力を天下にひろめた漢詩で、当時のベストセラーになり多くの文人が、月ヶ瀬を訪れた。溪谷のひびきと梅の香の漂う月ヶ瀬に建つ碑に往時の文人たちをしのんで立つ老人に亡き父の杖つく姿をかさねた。

佳作

コロナ禍に二年の月日流れおり

「拙堂ノート」の表紙を開く

津市 小松優子

専修寺の御堂の中より経の声

清らに流れ来朝の境内

津市 山下幸子

風雪にたへて幾世の城垣の

すき間にひそと残る虫鳴く

津市 葛西時子

人の世と亀の世隔つお堀端

春の陽受けて十匹の亀

津市 久松由貴子

専修寺の空に春雲現はれて

一身田野をわたりゆくなり

津市 奥山 功

濱荻の咲きたる浜辺伊勢の海

洋々として海鳥の飛ぶ

津市 岡 公一

高虎の遺訓碑の前に立ち居れば

今朝の腹立ち驕りやわらぐ

津市 前川 加代

第六回齋藤拙堂顕彰吟道大会開催

令和四年三月二十日（日）津センターパレス二階の中央公民館に於いて、第六回齋藤拙堂顕彰吟道大会が、主催・津市吟剣詩舞道連盟、共催・津市、後援・齋藤拙堂顕彰会によって開催されました。

前葉泰幸津市長他来賓の方々にご出席賜り、ご挨拶の後、俳句・短歌の表彰が行われ、選者講評ののち受賞八作品が朗詠されました。

受賞者の方からは、作品が朗詠で披露されたことに大変感激を受けて戴きました。

大会は加藤龍宗先生企画構成による「齋藤拙堂の街・郊外を詠う」という構成吟を始め、会

徴句ふ父の遺愛の漢字辞書

初めの「亜」の字子の名に亜がす

津市 白木ひろ海

寄り添うて肌ふれてみる老木に

今日の日向の残り香もらう

津市 山岸美智子

拙堂は故郷の津にもどりきて

茄子のあさづけをゆたかと詠みぬ

津市 田中 穂波

員の吟詠・舞が演じられ盛会裏に閉会致しました。



ご挨拶

津市議会議員

田矢 修介

この度は温かいご支援を賜りまして誠にありがとうございました。

あらためまして皆様の真心に深く感謝し、津市の文化振興、伝統継承への取り組みと真摯に向き合っております。

さて、令和四年度改訂の津市学校教育副読本に齋藤拙堂が掲載されることになりました。僥越ながら、平成二十九年の津市議会本会議における質問を思い起こしております。

（田矢）津市が誇る偉大な漢学者、齋藤拙堂について津藩校有造館での遺訓や実績を現在の学校教育に生かすべきではないか。

（教育長）各学校において地域の発展に尽くした人々の生き方や業績について調べるといふ学習を展開しています。今後も地域の先人の生き方から学ぶ活動を取り入れた学習を積極的に進めてまいります。

（田矢）ぜひ津市の副読本に齋藤拙堂の記載をしていただいて、子どもたちが齋藤拙堂に触れる機会をより多く提供していただくということを目指しますがいかがでしょうか。

（教育長）副読本への掲載は、次回改訂時期の検

討項目とさせていただきます。

質問から今日に至る間におきまして顕彰会の皆様のご尽力により小学三年生副読本への掲載が実現されました。

七期目となります。今期も津市のため一生懸命活動させていただきたく、皆様のご指導・鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

建物や街に求められるものとは

本会理事、津市議会議員

村主 英明

以前にもこの会報で、建築系の技術職員として国土交通省（以前は建設省）と関係機関に勤務し、住宅・建築・都市計画関係の仕事をしてきたという自己紹介をしました。今はふるさと津市に戻り、市議会議員をしている身ですが、これまでの仕事や経験を通じて表題について感じてきたことの一端を吐露してみたいと思います。

「建物や街に求められるものは何か」、皆さんはどうお考えになりますか。

経済社会の成長、技術の発展を受けて、利便性、安全性、快適性といった機能面・性能面が追求されてきました（そのために、スクラップ・アンド・ビルドが繰り返されてきました）。一方で、建物や街は私たちの暮らしや活動を包み

込む空間ですので、そこには、安心感、信頼感、畏敬の念といった精神的な側面も重要な要素です。

この「機能面・性能面」と「精神的な側面」は、どちらか一方だけで足りるというものではありません。しかし、時代の要請もあり、何十年と前者を追求する中で、後者をないがしろにしてきてしまった面は否定できません。

そして、これは私の個人的な考えですが、両者を比べると、後者の精神的な価値の方が重要であって、前者の機能面・性能面（言い換えると技術的な価値）は、それ（精神的な価値）をより高度に実現させ、補完する役割を担うべきである、と考えます。

機能面・性能面の「技術的な価値」は、これからも知見を結集して高めていくことが可能ですが、「精神的な価値」については、新たに創造し、高めていくことは容易ではありません。長い歴史の洗礼を受けながら現在に息づいているものに普遍的な価値を認めることが最良の方法だと思います。

その具体的な事例は、県下にも津市内にも少なからず存在しています。現存する伝統的な建物や街並みをまず大切に維持保存し、さらに文献などで可能なものについては補修復元を進めたいものです。これは懐古主義、復古主義ではありません。本当に取り戻したいものは、建物や街並みといったハードではなく、そこに宿る

精神的なものなのです。そこには、見失いかけていふるさとのアイデンティティを見つけるヒントやきっかけがあるだろうと思っています。本稿では自分の経験から建物や街について触れましたが、伝統的・普遍的な価値を持つものには、文化、芸術、産業、人物なども含まれることは言うまでもありません。

令和四年度拙堂会総会報告

令和四年五月八日（日）アスト津・橋北公民館研修室Aにおいて、第六回総会が開催され、各議題が満場一致で可決されました。以下、これを要約して報告します。

令和三年度事業報告

・拙堂會報 第十号令和三年六月一日

第十一号令和三年十二月一日発行

・齋藤拙堂顕彰出張講座は、新型コロナウイルス感染症防止対策のため実施できませんでした。

・拙堂塾（講師 齋藤正和）は、橋北公民館会議室にて第一回「海防五策その一」を令和三年六月二十日・第二回「海防五策その二」を令和三年七月十日・第三回「海防五策その三」を令和三年十一月十四日・第四回「京華游緑」を令和三年十二月十二日・第五回「土道要論」

を令和四年一月二十三日・第六回「月ヶ瀬梅溪十律」を令和四年二月二十日に開催しました。石水博物館主催で第七回「石水博物館企画展記念講演会」を令和四年三月二十七日に三重県美術館講堂で開催しました。

・齋藤拙堂顕彰会「第六回俳句・短歌」の募集を令和三年十月一日～十二月十日に実施（本紙7～9頁をご参照ください。）

・齋藤拙堂顕彰会「第五回小中学生書道展」作品募集十二月二日～一月十六日（本紙6～7頁をご参照ください。）

作品展示会・表彰式は新型コロナウイルス対策のため中止となりました。

・齋藤拙堂顕彰第六回吟道大会と俳句・短歌の表彰式は、令和三年三月二十日津中央公民館で開催され、俳句・短歌の入賞作品が吟詠されました。（本紙9頁をご参照ください）

・インターネット「齋藤拙堂顕彰会ホームページ」を更新しました。

・齋藤拙堂著作の漢文・漢詩・古文の翻訳事業は、新型コロナウイルス感染症防止対策から活動できませんでした。

・新規事業の取組として、「郷土資料館の設立」を目標に調査活動を実施しました。調査先は、亀山歴史博物館・名張市郷土資料館・松阪市歴史民俗資料館志摩市歴史民俗資料館・朝日町歴史博物館・四日市市楠歴史民俗資料館です。

・会員増強については、事業の拡大・新規事業の取組等必要な資金調達を目的に会員の増強に取り組みましたが、新型コロナウイルス感染症防止対策から積極的な活動はできませんでした。

令和三年度決算報告及び監査報告

決算報告

収入合計	一、〇一五、五五九円
支出合計	七〇九、二二七円
事業費	五四八、四〇〇円
運営費	一六〇、八二七円
繰越金	三〇六、三三二円

監査報告

会計は適正に処理されている。

監事 國分昭男・米田堯光



令和四年度事業計画

・拙堂會報発行 令和四年六月一日第十二号

令和四年十二月一日第十三号

・齋藤拙堂顕彰出張講座の実施

・拙堂塾の開催（講師齋藤正和顧問等）

場所：橋北公民館会議室

令和三年度に続き実施する。

第八回令和四年五月二十二日は中止し、第九

回令和四年六月二十六日・第十回令和四年七

月二十四日・第十一回令和四年八月二十八

日・第十二回令和四年九月

・拙堂塾野外講座「養老大垣へのバス旅行（令和四年十月中旬頃）」

・齋藤拙堂顕彰会「第七回俳句・短歌」の募集

令和四年十月一日～十二月十日頃

・齋藤拙堂顕彰会「第六回小中学生書道展」作品募集

令和四年十二月一日～令和五年一月十五日頃

書道展

令和五年三月三日～三月五日 リージョンプラザ

・齋藤拙堂顕彰第七回吟道大会と俳句・短歌表彰式

令和五年三月下旬頃

場所 中央公民館ホール

・インターネット「齋藤拙堂顕彰会ホームページ」の更新

・齋藤拙堂著作の漢文・漢詩・古文の翻訳事業

齋藤正和顧問を中心に活動する。

・津市に郷土歴史博物館の建設推進活動

飯田理事長を中心に活動する。

令和四年度予算

収入合計 一、一六二、三三八円

支出合計 八五五、〇〇〇円

事業費 六五五、〇〇〇円

運営費 二〇〇、〇〇〇円

繰越金 三〇七、三三八円

会員の増強に関する件

事業の拡大・新規事業の取組などに必要な安定した資金の調達を目的に、会員の増強に取り組みます。目標 団体総数三〇先三十六口、個人総数二〇〇人（二三三口）

理事の増員

事業の円滑な運営を図るため、理事（会員募集担当）一名を増員する。任期は令和五年総会開催日までとする。

新理事 荒木康行氏 株式会社百五総合研究所代表取締役

齋藤拙堂顕彰会役員

会長 加藤 龍宗

理事長 飯田 俊司

常務理事 安村久仁男（会計）

理事

伊藤 誠司（広報）

稲垣 武嗣（書道展）

小川 直紀（書道展）

小林 貴虎（三重県広報）

種田 真山（総務・企画）

林 朝子（書道展）

藤貴 静扇（広報）

水谷 忠文（総務）

山崎 満世（俳句）

澤口 真理（漢文翻訳）

村主 英明（津市広報）

高岡 弘典（漢文翻訳）

田矢 修介（津市広報）

監事（新任）荒木 康行（会員募集）

米田 豊山

三芳 公子（短歌）

前葉 泰幸

伊藤 歳恭

齋藤 正和

中川 禎二

顧問

齋藤拙堂顕彰会ホームページをご利用下さい。
下記QRコードからアクセスできます。

ホームページURL

<http://setsudo.jp/>

